

## 大名華族としての島津家と鹿児島 (要旨)

寺尾美保\*

本報告では、明治期の大名華族と旧領地の文化形成の関係を探るため、島津家・鹿児島を事例に報告を行う。本来なら両者の関係性を見る複眼的な視点が必要ではあるが、本報告では、本テーマを探究するための前提として、文化形成主体としての島津家(大名華族)が旧領地(地域)の文化形成に関与する契機としてどのような歴史的背景を認めうるかを模索することを課題とする。

今日、鹿児島の歴史と島津家の歴史は、ほぼ同質のものとして扱われている。特に、幕末維新期の旧薩摩藩の活躍や藩主であった島津斉彬の存在が、全国的に知名度の高い西郷隆盛と同じように重要な歴史として捉えられている。本報告では、その発信源を遡る作業を行うが、これにより、島津斉彬を崇拜する鹿児島関係者による顕彰ではなく、島津家が自らの家の歴史として斉彬を顕彰してきた行為が、地域の歴史としても定着していったことが明らかにできた。

大名家としての島津家は、従前には鎌倉以来の長い歴史を有する家であることや、琉球支配を通じた異国情緒あふれる文化を有していることを自負していた。しかし、明治維新後の島津家は、「三公(島津斉彬・島津久光・島津忠義)」の事績を詳らかにすることに力を注ぐようになる。そのきっかけを作ったのは、戊辰戦争に至る変革期に功績を残しながら、新政府の政策に与することができなかった島津久光であった。幕末期には国史編纂に感心が高かった久光が、島津家の維新史編

纂に尽力するようになった画期は西南戦争であった。西南戦争を境に、久光は島津家の維新史に傾倒していく。そしてこの時期は、久光の陰に隠れ、維新後も長く鹿児島に留まっていた忠義(久光実子、宗家当主)が華族として上京し、新たな島津家を出発させる時期と重なっていた。島津家は、華族として近代国家の中に与すると同時に、大名としての家の歴史を継承することの両輪を推し進めようとした。

島津家が描こうとした歴史は、端的に言えば、西南戦争を語らない維新の歴史であった。島津家は明治大正期を通じて、斉家の基礎の確立と三公の事跡の蒐集・編纂・公開を模索し続けた。これが鹿児島の歴史となる過程の解明は、今後の課題であるが、本報告においては、島津家が設立した博物館が重要であり、戦後復興や周年の祝事も一つの契機となっていることを示した。

---

\*東京大学大学院生